



■ **普段の生活スタイルでお出迎え**
 協議会に登録している受入家庭は現在33軒。学生を迎え入れるにあたって、特別な準備は必要ありません。普段と何ら変わらない田舎暮らしが体験できるように、訪れた学生にはお客様扱いせず接します。寝食を共にすることで、学生との間には、本当の家族のような親近感が生まれ、「また一

民泊先はごく普通の一般家庭。そこでの体験は学生たちにとって、農漁業体験と並び、この農家民泊の魅力になっています。今回の特集は、農家民泊の魅力に迫るため、アメリカの学生が訪れたときの様子を取材しました。



民泊で得たつながりは地域の宝

農家民泊を始めて今年で3年目を迎え、受け入れ者数は、年々増えてきています。涸沼周辺ならではの体験を中心に提供したことが人気となり、今ではリピーターも数多くいます。協議会設立当時は、本当に来てくれるのかと不安でしたが、今では受入家庭の皆さんは、若い学生との交流を喜び、農家民泊を楽しんでいます。

農家民泊をすることで、海外の人たちとの交流も生まれることに加え、地域コミュニティがこれまで以上に深まっていると感じています。学生が国へ帰った後も、感謝の言葉を綴ったハガキが届くこともあり、受入家庭の励みとなっています。

滞在中のみにとどまらない「つながり」が、この農家民泊の一番の魅力で、原動力にもなっているのですね。今後も農家民泊での出会いを「一期一会」として大切にしていきたいです。

ひろうら田舎暮らし体験推進協議会
 清水 勝利会長

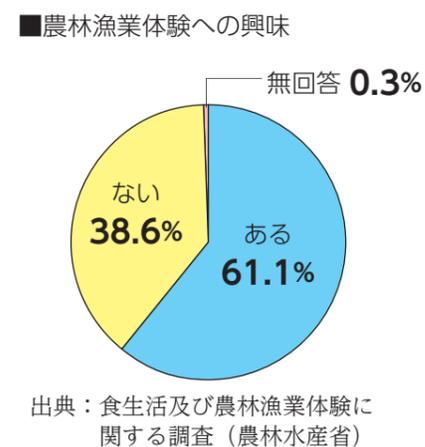
■ **いつもの農漁業が感動体験に変わる**
 日本文化を取り入れた体験のほか

人、子どもや孫ができたようだ。」と受入家庭は嬉しそう。
 しかし、家庭で学生を迎えることに抵抗や不安はないのでしょうか。生活スタイルや文化が異なる海外の学生を受け入れるとき、不安に感じるのはいり言語の違い。それも今では「知っている数少ない単語と、身振り手振りのジェスチャーで何とか通じてしまう。」とのこと。中には、学生から外国の異なる文化や習慣を教わり、貴重な経験ができたと話される方もいました。

に、季節に応じた地元農作物の収穫体験、郷土文化や料理体験など数あるプログラムの中でも、涸沼を活用した体験が大人気。夏を中心に行われるいかだ乗りや地元の伝統漁体験に体験者は集中します。
 どの体験も地元の人にとっては、いつもの光景であり、地域に受け継がれてきた当たり前の生活の一部ですが、「体験者から『観光地では絶対に味わえない経験ができた。ひろうらに来て良かった。楽しかった。』と言われるのが、嬉しくて誇らしくもあり、やめられないんだ。」と協議会の皆さんは話します。



■ **農家民泊で田舎暮らし体験**
 農家民泊は、農山漁村地域において、自然や文化、人々との交流を楽しむ滞在型の新しい観光として注目を集め、全国でもその取り組みが増えています。
 町内でも下石崎地区を中心に、涸沼を活用した民泊・各種体験プログラムを提供する「ひろうら田舎暮らし体験推進協議会」（以下協議会）が平成27年に設立。
 町外からの集客力を上げて地域活性化を目指し、これまで国内をはじめ、タイや台湾、アメリカなどからの学生を計553人受け入れてきました（平成29年7月末現在）。
 茨城町は、首都圏からのアクセスが良いこと、ラムサール条約登録湿地と



なった涸沼など自然環境に恵まれていることや、体験に合った地域資源が豊富に揃っていること、そして何より人の温かさに溢れていることが農家民泊にぴったり。学生の教育・体験・交流型旅行として国内外から多くの体験者が訪れます。



特集 受け入れてよかった 農家民泊